

第4回 国立市文化芸術推進会議 議事要旨

1. 日 時 平成30年7月23日(月) 19:00～21:00
2. 場 所 国立市役所3階第3・4会議室
3. 出席者 (委員)
足羽委員、高橋委員、綿引委員、福間委員、今村委員、渡辺委員、久保委員、沢辺委員、湯本委員
(欠席委員)
池田委員
(事務局)
伊形生涯学習課長、青木社会教育・文化財担当主査
4. 傍聴者 1名
5. 議 事 (1) 開 会
(2) ヒアリング①(多摩美術大学美術学部共通教育准教授 中村 寛氏)
(3) ヒアリング②(国立市観光まちづくり協会 理事長 三田 友一氏)
(国立市観光まちづくり協会 松本 陽氏)
(4) 事務局からの連絡事項
(5) 閉 会
6. 配布資料 資料4-1 文化芸術推進会議の検討内容について

7. 内 容

■池田議長が所用により欠席のため、文化芸術振興会議規則第3条に基づき足羽副議長において議事進行を進めることを確認した。

(1) 開会

■事務局より本日の配布資料の説明を行った。

(2) ヒアリング①

■事務局よりヒアリングの進め方について、説明があった。

■事務局より本日のゲストスピーカー(多摩美術大学美術学部共通教育准教授 中村 寛氏の紹介があった。

■ゲストスピーカーよりヒアリング資料に基づき以下の通り説明があった。

【中村氏】

◇私は現在、多摩美術大学で文化人類学という科目を中心に、幾つか授業を担当している。
◇共通教育と呼ばれるところは、教養科目で、ほぼ全学科の学生と対峙して、授業するということが強みであり、それにより、デザイン学科の学生やファインアートの学生など様々な学科の人たちと話す機会が多くあったことから、自主ゼミのような形で取り組みを始めていくところである。

◇個人の研究内容としては、暴力が基本的な大きなテーマで、そこに生じる社会的痛苦と向き合っていくときに、文化表現、アート&デザインを生かしたようなさまざまな取り組みが出てくるということで、その3個の関係を、様々なフィールドでとらえていくことが現在の研究テーマである。

◇アメリカがかつてより私のフィールドワークの場所であり、ニューヨークのハーレムの中で、9.11の直後ぐらいからイスラム運動をずっと追いかけて、フィールドワークを行っている。

◇また、いわゆるインフォーマル・セクターと呼ばれる人たちや、アメリカの都市部に限らず、社会的な周縁における文化的な表現についての研究や、国内でも、いろいろな研究プロジェクトをやっていきたいと思いながら今に至るが、特に最近取り組み始めているテーマは、アート&デザインの人類学である。現在、アーティストやデザイナーと知り合う機会がとても多いため、そういう人たちと対話をしながら、デザイン・アンソロポロジーのラボを立ち上げようと話してみたり、あるいは、アートのオルタナティブ・スペースというものが、今、あるが、そういうところに入っている人たちと、前衛芸術の現在版は、どのようにあり得るのかということを考えたり、そういうクリエイティブティが出てくる場所でのフィールドワークが日本での主な仕事となっている。

◇現在、若手の学生たちや卒業生たちを中心に、「人間学工房」を立ち上げ、さまざまなプロジェクトを行っている。

◇今、お手元にお配りしてある『はじめのはなし』という絵本や、冊子プロジェクト『Lost and Found』が本プロジェクトで取り組んだ内容となっており、長期にわたるワークショップを兼ねて、始まりから最後のデザイン面まで、文面も、ストーリーも、すべて自分たちで考え、手づくりで、ディストリビューションまで自分たちでやろうというものである。

◇印刷だけは業者に入ってもらったが、そこは、多摩美術大学から予算をつけてもらい印刷代だけは出してもらったが、後のディストリビューションの最後のところまで、面倒を見るという長期にわたるプロジェクトであった。

◇きっかけは、冊子に関していうと、多摩美術大学の学生たちは卒業論文がない。これは、私個人としては非常に不幸なことだと思っているが、ない、ないと嘆いても、しょうがない、そこで、自分たちでそういう場所をつくってみようということで、数人の学生と一緒に始めたプロジェクトである。

◇最初は、4,000文字のテーマを自分で設定して、「同時代とアート」という投げかけに応じて、それぞれの文体で、今、自分が一番リアルに考えていて、一番切実に抱えている問題は何なのかということをも、4,000文字のフォーマットの中で自由に書いてもらう。

◇それを書いてもらうだけではなく、読み合っ、音読し合っ、コメントし合っ、半年間書き直していったものを、最終的に活字に組んで、その後、デザイナーの学生や卒業生にDTP作業をやってもらい、商業出版だとできないようなことも、遊びとして、いろいろ挿絵を挟んだり、余白をたっぷりとったりといった工夫して、最後、表紙絵を決めて、デザインまでやって、印刷業者との色校までやるということも含めた長期にわたるワークショップを行っている。

◇キーワードは、ここでやっている取組みは、フィールドワークとワークショップに基づく製作が大半を占めていることである。

◇人間学工房は、数年前に、Vol. 1を手がけて、表紙絵を描いてくれた平山 みな美氏が、卒業し、ブックデザイナーになった。彼女がウェブサイトをつくって、今、「人間学工房」と検索をかけると、そのウェブサイトが出てきて、そこで、いろいろな連載を持ってもらったりしているの、興味があればチェックしていただきたい。

◇絵本の方は多摩美術大学の学生、卒業生たちと始めたプロジェクトだったが、私自身が非常勤講師として、他の大学に出かけていくことから、その際にその人たちを交えて、大学の領域を超えて絵本や冊子をつくらうと声をかけると、興味を持ってくれる人たちがいた。

◇この後の話にもかかわってくるが、美大以外にいる学生たちは、美大では何をやっているのかと興味がある一方、美大生は、一般の大学の人たちが何を考えていて、何をやっているのかということに興味を非常に持っている。

◇よって、交流する場所や仕掛けさえできれば、あとは、勝手に化学反応が起こる。これは確信を持って言えることで、どの版においても、どのバージョンにおいても、そういうことが起きたため、場所さえ設定できればあとは勝手に動いてくれるということが私の実感である。こちらが、あまり用意するのではなく、ファシリテーターはファシリテーターで、なるべく引いて見ているほうがいいものができるというのは実感である。

◇『はじめのはなし』というこの絵本は、中央大学のゼミナールの人たちと多摩美術大学生の人たちに来てもらい、ストーリーを考えるのに半年間、絵をつけるのに半年間かけて、1年がかりで作成したものである。

◇もう一つ経験の話をする、明治学院大学の教授で文化人類学者、環境活動家としても有名な辻 信一氏が手掛けている地域でのプロジェクト、「カフェデラテラ」でのお話もさせていただきます。

◇辻氏はとてもユニークな試みを90年代から展開しており、その中の1つに、ナマケモノ倶楽部という大きなNPO団体があって、そこから派生した1つのプロジェクトが「カフェデラテラ」である。これは、全国のお寺をカフェにしようという運動であり、これに賛同したのが戸塚の善了寺というお寺である。そこでは、敷地の中にスタジオスペースをつくって、キッチンの設備を整え、200人ぐらいで、手づくりでつくっていき見事なカフェをつくった。

◇今では、そこから、さらにNPOを増やして、カフェゆくり堂をつくり、そこで、私も時々出向いて、バーテンダーをやらせてもらっている。その時は、好きな音楽をかけては、地元の人たちやいろいろな人たちがやってきて、気が向くと、ちょっと音楽トークをやったり、ライブなども頻繁にこの場所を借りて行われたりしている。

◇辻 信一氏は世界中の活動家のネットワークを持っており、この間も、C. W. ニコル氏やサティッシュ・クマールというインド出身のイギリスの平和運動家がかかるなど様々な人がひっきりなしに出入りしている。また、明治学院大学がそばにあることから、学生たちがやってきて、いろいろ手伝いをしてという文化運動の場所にもなっている。

◇国立市で、若者を呼び込みながら、どういう活動や取組みができるかと考えたときに、複数可能性はあると思っているが、1つは、やはり、若手のアーティスト、デザイナーが来

て、活動できるようにすることを提案したい。特に、最初に念頭に置いたことは、美大を卒業したばかりの人たちであり、アーティストの自活の現状を憂慮してである。創作の意欲があったとしても、それを続けていくということは、相当大変な作業であり、これを町とコラボレーションできると様々なことが可能性として見えてくるのではないかと考えている。

◇先行事例として、参考としてニューヨークのソーホーという街の事象を紹介する。50年代、60年代、ソーホーは倉庫街だったが、アーティストが勝手に住みつきはじめた。グリニッチ・ヴィレッジという文化色の強い街が近くにあったため、そういう人たちがやってきて、屋根の高い倉庫をアトリエ・スペースとして活用し、勝手に改装して住み始めたところ、どんどん家賃が上がっていった、今や、アーティストが住めないぐらい高級な場所となっている。

◇一方、同じことが急ピッチで起きたのが、ブルックリンのウィリアムズバーグ周辺であり、本当に治安の悪い倉庫街だったところを、約20年前にアーティストたちに開放し、わざと呼び込んだところ、高級化がものすごい勢いで起きてしまったケースもある。

◇ジェントリフィケーションと呼ばれるこの現象は、ベルリンでも起こっているが、5年、10年前までは、まだまだ現役の若いアーティストたちがどんどん来て、芸術発信を担っていた。

◇上記のような先行事例がある中で、国立市がそうなれということではなく、あくまで参考までに置いておきながら、国立市という立地できることはないかと考えてみた際に、注意点の1つとして、アートとまちづくりや、市が実施する際によくあるのが、パブリック・アートをどうしようとか、まちおこし、芸術祭、トリエンナーレを呼んでこようという話になる。これは、良い側面も当然あるが、固定のパブリック・アートのようにしてしまうと、一回性で終わってしまい、今後のことを考えると、やってもいいが、これ以上増やしてどうするのかとってしまう。

◇もう一つは、アートでまちおこしが流行りとなっているが、これだけ増えてくると、弊害も出てきているとも感じている。私も様々な芸術祭を見て回っているが、うまくいってないケースも多々ある。依存するという形をとらなければ、やってもいいと思うが、依存する形はよろしくないというのが実感である。

◇これをどのように回避できるかと考えたときに、継続できるための仕掛けや仕組みづくりが重要になってくると思っている。文化的、芸術的なムーブメントは、社会運動と大きく異なり、継続のポイントとして「無理をしない」ということと、「楽しいということ」の2つが上げられる。これを見事に実践しているのが、先ほどの辻 信一氏であり、活動の端々に遊びをたくさんつくっている。

◇理念がすばらしく、みな賛同はするが、実際に動いてくれないと文化は広まっていけない。人が動くためには、何か楽しそうだと思うことが非常に重要である。よって、若い人たちを呼び込んで、一緒に知恵を絞ってもらうことが適当と考えている。デザイナーなどは、そういう仕掛けを考えるということを無意識にやっており、弊害もあることは承知したうえで一つのポイントとして置いておきたい。

◇もう一つのポイントとして、担当者などの特定の人たちだけが、リーダーシップをとってしまうと、どうしてもそれに依存する形をとってしまう。これは、数年はうまくいくが、や

はり継続しづらくなる傾向がある。

◇例えば、大学の研究者と地域が連携して何かをやろうすると、その人たちが、ずっと永住して、ずっとそこにいて、骨を埋めるつもりだったら良いが、体調を崩したり、大学を移ってしまったり、市の担当者も異動したりすることが発生し、途端に、それがなくなってしまうということが起こる。突然抜けるということは、大きなインパクトを地域に生んでしまうことになるため、これは防ぐ必要がある。

◇これを解消するためには、アーティストとデザイナーができる限り主体性を発揮できるための仕掛けと仕組みづくりが必要になってくる。つくり手たちが、勝手に動き出す仕掛けや市の担当者がメディエーターになるということが、とても重要なポイントになってくると思う。メディエーターは、ギャラリー、病院、施設などをつくり手をつなげていく役割を有しており、今、とても注目されている概念である。

◇リーダーシップをつくってしまうと、どうしても、そこに利権が絡んでくるため、市の予算絡みの面をきれいにしておく意味でも、依存する形をとらないということが重要かと考える。

◇以上の注意点を念頭に具体案を提示したい。私の提案は、つくり手のレジデンス・プログラムである。レジデンス・プログラムは、各所で行われているが、町で呼び込む形はそこまで多くない。

◇対象者は大学及び大学院卒業後の10年以内の若手というふうに限ってみてはどうか。年齢で切ってしまうと、例えば大学院などで、多くの社会経験を積んだ方で優秀な研究を行っている方を排除してしまうことになる。よって、年齢で切るのではなくて、卒業後何年という設定にすることはポイントである。

◇アーティストだけではなく、デザイナー、研究者、キュレーター、活動家、経営者などを含む混交型のレジデンス・プログラムにすることも良い。アーティストだけとやると、どうしても今までの通常のアート・イン・レジデンスのプログラムとあまり変わらなくなってしまうため、デザイナーや研究者やキュレーターを呼んで、一緒にコラボレーションしてもらおうという形をとってはどうか。

◇重要なポイントは、住宅とスタジオもしくはアトリエを、1年間から3年間、無料で貸し出すということである。ここは、できれば大胆に行ってもらいたい。これは、人数を限ればそこまで難しい話ではないだろうと思っており、あとは、家主、公営住宅との交渉が壁としてあるかもしれないが、乗り越えていけるのではないかと考えている。

◇もし、無料というハードルが高過ぎれば、家賃の何割かを負担するというプログラムにしておくと、実現可能性は広がると考える。

◇ここでは、アーティストも研究者もキュレーターも全部総合して、「つくり手」と呼ばせていただくが、新たなつくり手がやってきて、一定期間滞在して、何かをなしていくためのプログラムとしておく。また、ある程度制作費の補助を受けることができるような形にしておく。

◇後ほど具体的にするが、これをプロポーザル形式で公募するという形をとってはどうかと考えている。最初の1年目、2年目は、テークオフの時期なので、ある程度、声がけしておく必要もあるかもしれないが、プロポーザルで公募は必ず行ってほしい。

◇ポイントとしては、形式的な平等主義でおしなべて若手支援プログラムとするのではなく、プロジェクトの内容で、吟味して評価するということである。

◇また、審査はこういうことに経験にあるアーティスト、デザイナー、研究者の複数名で、審査を行っていき、これを毎年行う。

◇1年から3年のプロジェクトであるため、その人たちが滞在している間に、また新しい候補がやってきて重なっていくことになるが、それがポイントでもあって、1年、2年いる人たちの知恵が、次の代にも共有できるようなレジデンス・プログラムを組んでおくことが重要である。

◇また、地域への貢献だけではなく、プロジェクトや作品のおもしろさでも評価する仕組みにしておく。どうしても、町のまちづくりにという文句で入ってきてしまうと、予定調和の作品しか出てこなかったりということが起こる。よって、もう少し革新的なことをしたいという提案を歓迎するという態度で公募を行うことが肝要である。

◇ポイントの中でも特に重要なものが3点ある。1点目は国立という立地を考えると、多摩美術大学、武蔵野美術大学、東京造形大学、女子美術大学、国立音楽大学が近隣に点在しており、文化芸術の学び場が近くにあり、学ぶ人間がたくさんいるのに何にもないということのほうがおかしく、ちょっとした仕掛けをつくるだけで、人は随分動くのではないかと考えている。

◇卒業を控えた学生たちはやはり相当不安を抱えている。そのため、各国でやっているレジデンス・プログラムに申し込んで海外に出ていくわけであるが、それを、日本の国立市でできるとなったら、これは、一つの大きな経験になっていくと考えている。

◇もう一つは、展示スペースとなり得るギャラリーやカフェが複数あることである。私もかつて国立市に在住していたが、いろいろな人たちが、入っては出てという形で、切磋琢磨され新しいお店も増えた一方、昔からあるカフェもあるし、大きなスペースではないが、小さなスペースであれば複数あると思っている。そういうところで、展示ができるような場所が複数あるということは非常に重要だと思っている。

◇3点目は、都心からのアクセスがほどよいことである。例えば、多摩美術大学のそばの橋本駅の近くに、アトリエを共同で借りられるスペースがある。あるが、遠いというか、やはり、立地が不便で、オープン・スペースでアトリエを公開しますので見にきてくださいと言ってもなかなか出ていく気になれないのが正直なところである。

◇一方、国立市だと、散歩がてら行ってみようかとか、カフェめぐりの傍らに行ってみようかとか、好きなパン屋さんがあるから、パンを買いがてらちょっと見に行ってみようかということが出来る場所だと思っている。散歩のついでに展示を見にきたり、アトリエを見学しに来るといえることができるという立地が強みとなると考えている。

◇提案の展望としては、若手の間にこういう混交型のレジデンス・プログラムが話題になっていけば、継続的に人が応募してくるだろうと考えており、それが口コミで伝わっていくということがとても重要である。よって、最初の数年がとても重要になってくると思うが、逆に広まっていけば国立市の取り組みに当然注目が集まると思うため、ある程度放置しても継続性は担保できるのではないかと。

◇国立市のカフェやギャラリー、アート・スペースにとっても、人を呼び込むチャンスにな

っていくという相乗効果も期待できる。

◇このレジデンス・プログラムを経験したつくり手が、経歴の一つとして、このプログラムを書くことができるようになるということも重要である。ある程度名が挙がってくれば必然的にそういうことが起こると思うが、そうすると、その後の活動の中でも、国立市の滞在を、自分にとっての飛躍のモーメントとして挙げるができるようになっていく。

◇今回このヒアリングの話をいただいて、いろいろな人たちに話を聞いて回った。その中には、レジデンス・プログラムは、賛否両論もあり、うまくいっているケース、そうではないケースについて聞くことができたが、その中でも大きく印象に残っていることは、レジデンス・プログラムも、何でもいいわけではないということである。やはり、経歴に書ける、ステータスになるようなレジデンス・プログラムになっているということが、アーティストにとってはとても重要なことであるということを確認した。

◇アーティストは、全員が作家になれるわけではなく、どうしても競争が生じてしまう。年間、100人が卒業して100人が作家になれるかいうと、そうではなく一生それで生きていける人たちは、1人か2人というレベルである。

◇その人たちが、国立市のレジデンス・プログラムを体験し、ほんとうに良かったと言えるようなプログラムとなる可能性が十分あるだろうと思っており、その飛躍のモーメントになっていけるようなプログラムづくりが重要であると考えている。

◇そのうえで、具体的なプロポーザルとして考えられるものをいくつか例示させていただく。

①案は、週1度の創作活動を単なる創作会ではなくて、障害者施設に出入りしてもらいながら、描くということをやってもらうということはどうか。

◇「アール・ブリュット」、「ナイーヴ・アート」、「限界芸術」とは何だろうかという問いかけから、アーティストの中で、比較的多くの人が障害者施設を就職先を選んでいるという事実があった。厚生というと、一般化し過ぎかもしれないが、彼らのスピードにとってもなじむ一定数のアーティストたちがいて、とても居心地がいいそうである。学生のころからアルバイトとして出入りしていて、そこで一緒に絵を描いているというところで、雇用が見つかったからということで、就職していった人が複数名いる。

◇アートセラピー的なところとの兼ね合いで、現在ホット・トピックになっているが、こういうところに通いながら、ボランティアとして週に1回のペースで、一緒に絵を描くという事業展開をしてみてもどうかというのが①案である。非職業的なアーティストとアーティストの創造的なコラボレーションが起こるのではないかと考えており、そのうえで、1年に1度、描いてきた絵などを展示する展覧会を行って、その場に研究者、アーティスト、キュレーター、メディア関係者を呼んで、展覧会みたいなことをやってみてもどうかという案である。

◇第②案は、アーティストとデザイナーによる施設の改装プロジェクトである。病院や学校などの近代的施設は、なぜ、かくも殺風景なのかという問いかけは、多くの人が抱くのでは思っているが、特に病院などは典型例で、治るものも治らないということはよく言われていることである。アートセラピーの世界では、これを改善する動きが始まっており、可能性を模索している病院が、幾つか出てきている。

◇多摩美術大学でも、少し前から、医学との提携を打ち出して、医大とのコラボレーションを開始している。病院の改装から始まっているが、デザイナーなどは、現状でも医療機器に

携わっていることから、様々な可能性を模索しているところである。

◇今回の案では、アーティストとデザイナー3名で、共同作業で、リハビリ施設の改装を行うという想定をしている。いきなり病室をいじることは結構ハードルが高いため、まず、リハビリ施設のフィールドワークを、3カ月にわたって継続してもらい、その後に施設側及び市の担当者をまじえて話し合いを重ねていく。その上で、内装案を詰めて施工に至るところまで、全部やるというプロジェクト案である。

◇③案は、月に1度の「ちいさな音楽・アート・ポエトリー会」というものを企画してみようという案である。いつから、美術はすみ分けが加速したのだろうかという問いかけから、陶芸家、音楽家、詩人3人で、共同プロジェクトで、月に1度のペースで、国立市内のカフェやギャラリーや市役所などで、定期的にパフォーマンスを行っていくという案である。

◇これは、異なる分野の領域の芸術が混交する場所を、なるべくさまざまな場所で、公開してアクセスしてもらおうというものが狙いである。1、2年ずっとこれをやり続けているということが、一つの動きになっているのではないかとこの案である。

◇④案は、パブリック・アートの更新プロジェクトである。先ほど申し上げたとおり、そもそもパブリック・アートとは何なのかというところから、議論を詰めていくものである。アーティスト、キュレーター、研究者の3人組で、毎年、ある特定のパブリック・アートの更新作業を行っていくもので、非常にユニークなプロジェクトになるのではないかと考えている。制作と更新にあたりながら、その過程を記録し、議論を行っていく。月に1度は、公開討論会を、ギャラリーやカフェなどのスペースで行い、そもそもパブリック・アートには、どのような可能性があるのだろうかということをお話してもらい、会も開催してはどうか。

◇最後の⑤案は、「中学生とつくる」プロジェクトである。これは、小学生だとありがたいが、自分の体験を振り返っても、小学生のときは、体験としては残るが、やっていることの意味までは、よくわからないことが多かった。よって、中学生と一緒に、アーティストたち、デザイナーたちと、コラボしてはどうかというものである。

◇少しずつ頭がかたくなっていく時期のため、つくることの美しさ、楽しさを忘れたのは、いつ頃だったのだろうかということをお話するために、中学生を巻き込んで、アーティスト2名、デザイナー2名が、国立市に滞在し、月に1度、複数の中学校に通って、ファインアートに限らず絵を描いたり、絵本をつくったり、椅子を組み立てたり、パソコンを分解する。様々なものを手がけたり、解体してみたりと、プレデザインを考察する。私が中学生の当時にこのプログラムがあれば、真っ先に参加したいプログラムである。

◇現在、デザインの教科書制作に携わっており、今後高校の学習指導要領に盛り込まれる予定のデザイン教育以前に、「アート&デザイン」の本源的な楽しさを、中学生の段階で共有できれば、非常に意義深く、かつ、相当な先行事例になるのではないかと考えている。

■ゲストスピーカーの説明後、委員より質疑・意見等があった。

【久保委員】

◇私は国立第二小学校で現在、図工を教えているが、プロポーザル案②の中で、学校の近代施設は、なぜか殺風景なのかというご指摘をいただいているが、これはおっしゃるとおりで、二小は今後建て替えが予定されており、今、どういう学校をつくるか、どういう校舎をつくるかといった議論をゼロから始めているところである。

◇様々なお話を伺っていて、外からアーティストを呼んで、つくって、町を深めていくというイメージは湧いたが、この中で、国立に住んでいる方たちを交えた形は考えられるか。というのも、国立第二小学校をつくるプロジェクト会議のときに、PTA、保護者の中から、もっと私たちも意見を言いたいというお声があって、お1人だった予定が、複数名、会に参加されるようになったという経緯がある。

◇そういう意味では、国立市に住んでいる方は意識が高いと思っており、そういった中で地域に住んでいる方がプロジェクトにどう食い込んでいくかというところの先行事例や参考になるお話があればお伺いしたい。

【中村氏】

◇年齢層を問わず地域住民がという意味か。

【久保委員】

◇このご提案だと、外部から人を呼んでという前提がすごく感じられたが、そこにいる人たちが、もっとより議論に参加しているという前例があればご教示願いたい。

【中村氏】

◇まちづくりなどでその典型例はよく見られるが、有名な例では、水俣市の地元学という試みをご紹介します。書籍になり、注目が集まったモデルケースであるが、中身としては新しいことを言っているというよりは、総まとめをしたような取り組みである。

◇水俣はご存じのように、あれだけの公害を生んで、しかも、病気の名前に都市の名前がついてしまったためにもものすごい風評被害が起きて、住民の関係が一時的にずたずたになってしまった。

◇そこで、市に勤めている提唱者が、一人、一人、訪ね歩いていって、関係をもう一回作り直していくという、もやい直しと呼ばれている行動を起こした。

◇地元学というのは、学とついているが、学問ではなく、書籍の中では地域に住んでいる人を「土の人」と呼び、この人たちが中心に据わることを必須として、同時に、外部の人を「風の人」とし、これら呼び込まないと、新しい試みは進んでいかないとした。

◇具体的な取り組みとしては、土の人、風の人を配合しながら一緒に地域を歩かせ、写真を撮っていく。地域の人だけで歩いていたら、全くフレッシュな目で見られないので、風の人と一緒に連れ立って、歩いて、言葉を交わしながら写真を撮っていく。

◇それを小学生がよくやるように、模造紙に描かれた地図上に写真を貼っていく。そうすると、改めて、地域に何があったのかということが、写真で見えるようになっていく。その中では、水俣という名前からもわかるとおり、実は豊かな水源がある場所なので、その水源で、あんまり注目が集まっていなかった水源が新たに見つかったりして、今、水俣の駅へ行くと、ペットボトルに入れられた水が売られるようになった。

◇ちょっとアートとずれるかもしれないが、地域のプロジェクトで、外から人を呼びながら、中の人々が主役になっていくというまちづくりは、先行事例が幾つかある。

◇上記のような取組みを古くから行っていたのは、宮本 常一氏という民俗学者である。彼は離島振興法に尽力していたが、いわゆる内発的発展、地域の人たちが、何か町をよくしようとしたときに、予算が初めて生きてくるということを提唱していた人物である。

◇ところが、不幸なことに、後半になればなるほど、予算獲得のためだけの法案になってい

ってしまって、最初に宮本氏が入れられた対馬は、すごく思い入れのあった場所だったが公共事業でずたずたになっていった。よって、これは、あまり成功事例ではないが、失敗事例も頭に置いておく必要があるかなと思っている。

◇では、アーティストたちと一緒に考えたときにどう考えられるのかというと、やはり、同じことが言えるのではないかなと思っている。ここに外から人を呼ぶということを前提としているが、やはり、滞在し過ごしてもらうということは、すごく重要だと考えている。

◇学校や病院でもそうだが、いきなり、外からアーティストを呼んでやると、見事な絵がかかったりするが、全く文脈がないというか、なぜこの壁にこんな大型の絵が入っているのという気がする。やはり、フィールドワークで通ってもらい、創作の前に一定期間滞在してもらうということが重要になってくるのではないかなと思っている。

【久保委員】

◇今まさに、学校をどうつくるかと考えたとき、文化の拠点になるものが学校だと私も考えているので、そこは、ほんとうに機能面だけではなく、これから子供の意見も聞いて、どんな学校がいいかということを集約して、まさにこの楽しいところ、おもしろいところ、わくわくする場所をつくるというところから始めているところなので、非常に参考になった。

【中村氏】

◇困難を極めるとは思うが、メディアエーターの人が、声を出すのではなく、引いて見ながら、バランスを気にしてないといけないと感じている。

◇市民に誰でも参加できるとやってしまうと、起こりがちなことだが到底いいものはできない。かといって、専門的なプロのアーティストを呼んできて、さあ、やってくださいといっても、その作品自体は安心感を持って眺められるが、地域にとっていいものにはならない。

◇よって、若手の人たちに入ってきてもらって、一定期間過ごしてもらうということが、個人的にはすごく重要かなと思っている。

【福間委員】

◇本当に良いアイデアがたくさんあって、どのプロポーザルをやってもすごいなと感じているところである。

◇一般的な話になるが、先ほどのベルリンの話は東ベルリンの話で、たまたま、そのころヨーロッパにいたため記憶にあるが、あそこがあのように若者たちの芸術の場所になっていく過程で、まず、基本的には違法に住みつくとということから始まっていたと思う。

◇多分、ソーホーもそうだと思うしブルックリンもそうだったような気がするが、最初は、違法的というか、行政などが関わることは違うエネルギーが働いて話が始まっているように感じる。

◇今回、提案いただいた行政で用意してしまったものと、そういうものとのつながりはなかなか難しいと思うし、行政が用意したものは、結局は、奇妙に恵まれ過ぎていて実はどこかで力がないかもしれない。これに関しては、決定的な解決策はないと思っているが、この辺については、どのように考えていったらよいか。

【中村氏】

◇ニューヨークの事例が、まさにスクワッターから始まっているため、その問題については、私自身もよく考えることであるが、一つの考え方としては、行政が資金、予算は提供するが、

あまりうるさく介入しないことがとても重要だと思っている。

◇もう一つ文脈があって、アメリカやベルリンは日本と公的な仕組みが全然違うことと、文化的な許容力が全く異なっている。つまり、日本でスクワッターが出てきたら、途端に、強制退去と追い出しがリーガルに行われる。

◇ところが、欧米ではスクワッターという形で不法占拠していても、これを追い出そうとすると、かなりの反発がニューヨークでも、ベルリンでも起こるといふ文化的な素地がある。

◇だから、日本で同じように不法占拠をして、アーティストにどうぞやってくださいといつても、多分誰もやらないと思っているし、継続するムーブメントにはなっていないとも思う。

◇よって、その中間というか、かわりにできることとして、そんなに恵まれた予算ではないかもしれない、逆にそれがいいとも思うが、住居とアトリエは提供するので好き放題使つて良い、中は幾ら改装しても良いといった仕掛けをしておく。

◇最初の3年間ぐらいが、テークオフの時期なため、ある程度は方向づけのために、介入せざるを得ないとは思っている。

◇考え方として、決まってしまうつまらなくなったら一回解体して別のやり方を考えればいいということもできるが、このレジデンス・プログラムのようなのは、少なくとも10年はやってみないと、どういう効果が出てくるかわからない。10年から20年は継続できる仕掛けが必要かなということを考えおり、ニューヨークやベルリンとの事例とは一般的な比較は難しいところである。

【福間委員】

◇やはり行政側の関わり方については、できるだけ力を及ぼさないで生まれてくる力を得ていくということになると思う。

◇私自身が大学教師をやっていたときに、自主ゼミなどを開催していたがうまくいかないことがあった。例えば自主ゼミなどでも一部の学生が教員以上に力を持ってしまうとか、そのグループに合わない、もう続いていかないようなことが起こったりする場合があります、私自身もその自主ゼミの中で、力を持っている何人かに対して、嫌になったり、うんざりしてしまったこともあったくらいである。

◇一方、配布されている絵本、冊子はものすごくよくできているし、すごくうまくいっていると思っていて、それぞれの個性が発揮されている印象を受ける。どういうふうにしたら、先ほど申し上げたことが起こらないかということをご経験から教示願いたい。

◇私がやった自主ゼミについていえば、教員が2人いて、学校の中外からも批評家たちが来たが、やはり、ある程度まずい部分に対しては、怒らないといけないと私自身は考えていた。しかし、もう一人の教員は別な見方もあると思うが、絶対怒ってはいけないというような態度だったと記憶している。

◇関わり方としては、出来るだけ関わらないで、自由を尊重して自然に生まれてくる力、あるいは、既にあるものをつながっていくということが大事だと思うが、もう一方では、どこかでチェックしなければいけないとも思っている。その線引きのようなものはあるか。

【中村氏】

◇自主ゼミとはいえ、大学の中で行うとやはり難しいことは、最終決定がどうしても教員に

来てしまうので、要するに、いきなり訴訟ということにはならないかわりに、そこでおさまってしまうということだと思っている。

◇ところが、国立市でこれをオープンな形でやるということは、みんな大学を卒業して、要するに、全責任を自分で引き受けますという宣言をしながら、アーティストとして応募してくるし、デザイナーとして応募してくることとなる。卒業したてなので、失敗するかもしれないため、そこは目を光らせておく必要があるが、問題が出てきたらそのときに交渉していくということも、とても重要な育てになっていくと思っている。

◇交渉してもらうための窓口があるということをあらかじめオープンにしておけば、ある程度問題は解決できると考えている。

【足羽副議長】

◇福間委員のご指摘もそのとおりだと思う。ゼミなどのグループであれば、そこそこのものができればいいというか、出来・不出来も年によって違ったりするが、ある程度プレステージアスというか、このレベルのアーティストインレジデンスであればおもしろい、キャリアにもなるといったものになるとかなり高め合っていく必要が出てくる。

◇日本のアーティストの決定的な問題というのは、自分の作品について語れないことだと思っている。描いた後はわかってくれという形で、アート・マーケットも自分たちではつくってこられていないのが現状である。

◇また、いわゆるアーティスト以外の、例えば社会運動家といった人々との横のつながりがとても少ないのも現状である。その辺を仕掛けているということは、とてもおもしろい提案だと思う。

◇プログラムの展開にあたっては、評論家による評価のみならず、例えばこのレジデンス・プログラムに、アート・マーケットのディーラーを入れてみたり、キュレーターを入れてみたり、詩人、小説家などいろいろな人たちが入り、さらにお互いに批判をし合うというか、高め合いながら評価していくことが重要だと思っている。

【中村氏】

◇おっしゃるとおりで、今までの美術教育が、日本では特にそうだったが、今でもやはり、それを引きずっているところがあって、つくって何ぼというか、とにかく手を動かせということを指導されているところがある。

【足羽副議長】

◇この前日本の大学院生とアメリカの大学院生がコラボレーションするワークショップを実施したところ、日本の学生が全然喋れていないことを目の当たりにした。先生方はつくったものを見て、それでおしまいだし、教える先生も作品を見て、学べといった姿勢であった。日本ではそれが一般的のような感覚を受けた。

【中村氏】

◇多摩美術大学でも今それを変えようということで、何人かの先生たちと本質が自分でつかめてなくてもいいので、話すということはある程度やっていかないと、どこに行っても恥ずかしい思いをするよということを行いながら様々なことに取り組んでいるので、これも、その習慣が根づくためには、やはり時間がかかるが、それと連動してこういうプロジェクトが動けば良いのではないかと考えている。

◇一方、海外では、今、逆転現象が起きているようで、要するにキュレーターのほうが、力が強くなってしまい、現代アートのアーティストたちは、キュレーターの意見を聞きながらしか制作をしない現状がある。これもこれで、何か弊害があるかもしれないが、だけど、そういう世界も、留学した人たちは見てきているのも確かである。

【足羽副議長】

◇キュレーターそのものは、クリエイターでもあるとも思っており、一概には弊害とは言えないのかもしれない。アーティストもべらべらしゃべる人がいなくなって、ちゃんと深い言葉を幾つか言えるだけで十分なのではないか。

【中村氏】

◇でも、つくり方はとても興味深いものだった。現代作家の人の話を聞いたところ、キュレーターと細かいやりとりまで、全部やりながら、作品決定までに多くの時間を費やしているということであり、かつての作家と編集者のような関係であると感じた。

【足羽副議長】

◇このプロジェクトに、インキュベーターのようなことができればかなり注目を浴びると思う。

【福間委員】

◇結局、ニューヨークも、ベルリンも、美術の世界は、迷妄的な批評というか、ほんとうに普通に絵を描きたくて、楽しくてというようなものからは、かなり遠ざかっているところへ来てしまっている気がする。例えば、ニューヨークで美術を勉強してみたいな若者に会っても、今、キュレーターの話を知ると、方向がわからなくなっている気がする。

◇美術は少し難しいところに来てしまっているという思いがある。そういう意味では、美術がもう少し素朴な次元に帰るという意味も、こういうことをやることで、また出てくるかもしれない。

◇もちろん、中村氏が美術大学から来られて、今日、プロポーザルの例をつくられていて、当然だと思っている、これにもう少し美術色を薄くするというか例えば、詩とか映画とか、まだ美術ほど複雑に難しくなっていないものでも実践も考えられると思っている。

【足羽副議長】

◇表現者のみならず、施策者、表現者という形だと、建築家、庭師、音楽家、詩人、職人、ダンサーなど、あらゆる人たちが入ってくるができる。その方が、いわゆるビジュアル・アーツの人にとっても良いと思う。

【中村氏】

◇可能性としては考えられる。例えば、映画も提案の一つとして入ってきても良いと思うし、3年間滞在して、映画1本つくるということも考えられると思う

【足羽委員】

◇海外からアーティストを迎えてもよいのではないか。

【中村氏】

◇それももちろん選択肢である。

【足羽副議長】

◇完全に日本人だけを集めるのではなくて、先ほどの風の人を海外から来る人と捉えてみて

も良いのではないか。

【沢辺委員】

◇私は、一橋大学はこのプロジェクトには活用していきたいと考えている。一橋大学は社会学を持っている関係もあり、中には、アーティストと触れ合いたいとか、音楽家と触れ合いたいと思っていたし、そういう人は今も結構いると思っている。

◇それでもきっかけがないとフラストレーションを持っている学生は、結構いっぱいいると思っており、何かのきっかけ、例えば、私が学生のころは、たまたま市制40周年で、文化芸術の町を目指すということで、例えば市の共催を受けることによって、芸小ホールを無料で貸してもらえたといった仕組みがあったので、そうすると、学生がハブになって、気づいたら、国立音楽大学や武蔵野美術大学の学生と一緒にプロジェクトをやっていたということがあった。学生が主体になるが、あくまでも事務局が存在し、それを市役所がやっていて、そこが色々なチェック機能を果たしていたように思う。

◇中村先生もおっしゃったように、メディアイーターになる人たちは非常に重要で、提案ではメディアイーターが市の担当ということをおっしゃっていたようにも思うが、先ほど、福間先生も、いかに、市とある程度距離を置きながら、かつイノベーティブなおもしろいことをやっていくかということ考えたときに、ある種そういった一橋大学の学生等をはじめとした大学の活用を考えてみるのも手ではないか。

◇もちろん、一橋大学だけでなくもいいが、いわゆるそういう大学が果たしている役割もあるだろうし、そういうことをやりたい人たちも結構いることから、いわゆるメディアイーター的なこと担うことはひょっとすると可能なのではないかとと思っている。

【中村氏】

◇おっしゃるとおりである。メディアイーターの存在は、とても重要で、ほとんどそこにかかっていると言っても良いと思っており、そこに、一橋大学という地元の学生が、興味を持って、入っていつてくれたら、とてもいいことが起こるのは間違いない。

◇実例があり、一橋大学の大学院生と多摩美術大学の大学院生を会わせる機会を何度か持ったが、やはり見事な化学反応が起きお互いとても深い会話をしていた。

◇両者とも、切実な問いを抱えていて、どうやって生きていくかということも含めて、どういうふうに社会と自分との折り合いをつけていくのかや、どのように社会に介入していくのか、あるいは、どのように関わっていくのかということの思いの丈を語っていた。その時に、やはり、教員は入らないほうがよく、話してくれる場さえつくれば、勝手に化学反応が起こるという確信を持ったところである。

◇また、今回のように一回会わせると関係が続いていく。これもやはり、勝手に続いていて、アーティストも卒業して、展示をやるときに、その人が出て行って、それに何か文章を書いてみたりというコラボレーションが起きたりするので、やはりメディアイーターの存在はとても重要ななと思っている。

【沢辺委員】

◇市役所の職員は多忙な印象を受ける。学生たちが現場に出て、アーティストと交渉してなどということが、どこまでできるのか分からないため、舞台をどうつくるのかのように、サポートする役割が重要だろうと思っており、そういう人材は必要になってくると考えている。

◇もちろん、監査役、いわゆる名のある芸術家がプロポーザル審査に入るということは、もちろん重要だと思う一方、いわゆる現場で、同じように動いていく人たちの体制をどう構築するかということが重要だと思っており、そこら辺をどのように考えるかが重要になる。

【中村氏】

◇おっしゃるとおりである。例えばプロポーザルのところに、現場に立って、一緒に動けるメンバーを提携者として挙げられるような項目を設けておくと、さらに動きやすくなるかもしれない。

【今村委員】

◇私は国立音楽大学で教鞭をとっており、音楽に関しても同じようなことがたくさんできると思ったところであるし、実際に、ご提案いただいた中ですでに実施されているものもたくさんある。

◇私自身は昨日になるが、旭通り商店会のビルで商店会の人たちとコンサートを開催するといった活動も行っているところである。

◇そのような地元の活動とは別に、やはり、レジデンス・プログラムというものをつくらねば、公募の仕方、どのように募集をかけていくかということは、すごく重要だなというふうに思っており、やはり、発信力のある公募の仕方でない多くの人には伝わっていかないと考えている。

◇様々な公募の企画などもあると思うが、発信力のある公募方法というものに関しては、どのように考えているか。

【中村氏】

◇公募については、先ほど申し上げているとおり、最初の年がとても重要だと考えている。例えば、東京アートビートをはじめ芸術関係者向けの媒体やサイトが幾つかあり、美大の人たちはほぼ全員そこに登録して、今やっている展示が何なのかというチェックできるようになっているため、そういうところを活用するということが1つ考えられる。

◇また、それこそ、美大にターゲットを絞るということを考えると、美大に出ていって説明会を行うことも考えられる。美大以外にも、一橋大学など近くにある大学すべてと連携し、そういう説明会を何年かかけてやっていくのも良い。

【今村委員】

◇大学連携を用いて説明会等を開催することはとても重要であると考えている。国立音楽大学だと、KCMC（国立音楽大学コミュニティ・ミュージック・センター）というものが最近立ち上がって、そこが、仲介役となって機能し始めている。よって、学生たちの間で興味のある人を集めて、ほかの大学とマッチングしてということは可能だと思っている。

◇ただ、レジデンス・プログラムとなったときには、やはり、学生では少し荷が重いとも思っており、中村先生がおっしゃったように、切実に表現したいとか、何か訴えなければいけないというふうに持っている者は、卒業した人々である。

◇自立していかなければいけないし、なので、そういうところで何がしかの応募の厳しさみたいなものがあって、それがちゃんとステータスになるようなものに設定しておき、それをサポートするサポート役として学生がその下に入れるような公募枠も設けておき、先輩たちが頑張っていて、しっかり活動して、成果物を出して、世に出ていっているということ、

学生がサポートをして、手伝いながら自分も目指すというような道筋が何となく描ける良いと思う。

【中村氏】

◇おっしゃるとおりで、主体は学生ではないほうが良いと思っている。卒業しているかの条件で、学部もしくは大学院を卒業して、私自身としては、卒業後すぐということではなく、応募期間を考えると、卒業制作にほんとうに真面目に取り組んで、何もできないということが実情だと思うので、卒業後の3年目から5年目にかけてで、次のステップで、このプログラムを活用できるようになるのがベストと思っている。

【今村委員】

◇あるいは、交換留学生で、アジアの大学などと交流するといったことも考えられる。現在、ドイツ、カールスルーエから来ている人がいるが、そういう人が何かのプロジェクトをやったときに、もう一度日本に来たいなどと思うときに、アクセスできることを考えた際に、住居があるということはとても大きいと思う。

【中村氏】

◇大抵のレジデンス・プログラムは、3カ月から5カ月で動いていかないといけない。しかし、このプログラムは、長期間住めるというところではかなり魅力的だと思う。代わりに、相当しっかりしたものを制作してもらう必要もある。

【今村委員】

◇世界に発信する国立市というふうになると、世界で認められる可能性もすごくあるので、そうすると、報道されていくことも考えられるし、発信力の強化にもつながっていくのではないかと。

(3) ヒアリング②

■事務局より後半のゲストスピーカー（国立市観光まちづくり協会 理事長 三田 友一氏、松本 陽氏）の紹介があった。

■ゲストスピーカーよりヒアリング資料に基づき以下の通り説明があった。

【三田氏】

◇国立市観光まちづくり協会は、この町の活力衰退を防ぐため、「地域を経営する」という視点から、観光まちづくりで、地域を経営していくというような視点は、非常に重要であると考えている。

◇資料にもあるとおり、国立市観光まちづくり協会は、13年前に、国立市の中小企業振興条例が制定された際に、国立市の商工会の地域活力創出委員会がつくられ、そこが母体となっている。

◇その後、平成20年10月にNPO法人の許可を受けることになるが、近隣では市の観光協会ということで確立しているところが圧倒的に多いが、国立市は会費で運営する日本でも珍しい観光協会である。

◇つまり、国立市の場合は市が運営しているわけではなく、ある意味、まちづくりがスタートだよという意味の名称もついているということで、大きな法人や個人の会費を一つの土台にして事業運営を行っている。

◇ある意味、国立市の住民が誇りと愛着を持つことのできる活力に満ちた、地域社会の持続的な発展というか、そうしたものを目指して、にぎわいあるまちづくり、まさに住んでよし、訪れてよしの魅力あるまちづくりを目指し事業に取り組んでいる。

◇実際の取り組みの中身としては、フィルムコミッション、シティプロモーションというくくりの中でメディア委員会と、イベント事業委員会、観光開発委員会という3本の柱で活動を進めている

◇現在実施している具体的な事業としては、シティプロモーションサイトの制作・運営として、くにたちNAVI、くにたちおしごと情報を運営している。情報発信事業では、会報やマップの作成事業である。

◇フィルムコミッション事業は、撮影の手配、アレンジ、撮影協力支援、FCサイトの運営、PR映像の各種媒体に配布といったことが内容である。

◇イベント事業の一環であるくにたちさくらウォーキングも、4月の桜の時期に開催しているが、年々定着しながら広がりを見せている。

◇また、桜ライトアップも、助成金をいただきながら去年から開始し、今年が本格開始となっており、夜桜を楽しむということで好評を得ている。

◇賑わい事業としては、年に4、5回、国立市のさまざまな生き生きした姿を切り取るというくにたち写真コンテストを開催しているおり、企業に協賛していただいて、賞品も出したりしている。また、最近でもデジタルフォトコンも開始したところである。

◇また、くにニャンの活用にも取り組んでいる。観光ガイドマップにもくにニャンを使用したり、小学校で活動にくにニャンを派遣したり、イラストの活用、動画作成など様々な展開を行っている。

◇2013年にくにたち観光案内人の運用を開始し市内のガイドツアーを始めている。観光案内人については、一定の講座を開設しながら案内人を育ててきた。運用開始から5年が経過したため、今年は2期生を募集したところである。

◇十二単着付け体験については、城山公園内の古民家で十二単を着ていただくということで、国際交流の一環として一橋大学の留学生にも参加してもらっている。日本の文化に触れる機会ということで非常に嬉しいという感想をいただいているところである。

◇「国立のヒマワリの種を町田リス園へツアー」は、国立の古民家の前でヒマワリを育て、それを町田のリス園に持っていくという内容である。町田からも来ていただいて、そのヒマワリを持って、町田のリス園と一緒に回るツアーとなっているが、非常に好評で2台の大型バスがいっぱいになることもある。

◇観光ガイドマップは、現在、英語版と日本語版を発行している。また、町歩き必携ということで、先ほどご案内した国立の観光案内人が作成した『くにたち観光ガイドブック』は、書店で、800円で販売している。

◇ガイドブックは、まさに手づくりで、業者がまとめるのではなく、観光案内人が実際に歩きながら、国立の町をどういうふう歩いたら、楽しいかなということで、本当によくできていると自負している。一つ一つこのとおりに歩くと、無理なく歩けて、国立の町を立体的に理解でき、国立の歴史を把握できる18コースとなっており、国立から国分寺や日野までつながるものもある。

◇このガイドでは、特に新選組、土方歳三ゆかりの地を訪ねて、谷保から日野、高幡不動尊へというコースが非常に人気である。やはり新選組には、女性ファンがとても多く、今後は本田家も本格修復されると聞いており、本田家は土方歳三とのゆかりも非常に深いことから、今後の展開が期待できると感じている。

◇本田家は、最初はなかなかご案内するといっても、ちょっと無理があったかなと思っていたが、我々のほうで地道に本田家のご案内をさせていただいていたところ、近年では本田家のご当主や関係機関にも協力をいただけるようになった。

◇また、くにたち花と緑のまちづくり協議会との連携で、大学通りの花畑の維持管理にも協力している。

◇さらに、旧車祭の取組みについてもご説明させていただく。谷保天満宮には石碑があり、そこには、100年前に初めて皇室の方たちがドライブで来て、谷保天満宮で昼食をとったという記録があった。そこから派生し、現在では、古い名車を愛している方々が旧車祭をやりたいということで、一緒に協力しながら進めているところである。

◇ちなみに、その当時の車両にはタクリー号という愛称がついており、現在、市内のタクシーにも、タクリー号の絵が載ったりもしており、市内のタクシーを、タクリー号と呼んでもらう活動も行っている。

◇どんと焼き、まと火事業にも協力している。まと火は昨日行われたようだが、日野橋のふもとで実施されており、北秋田市と共同で行われている。まと火は北秋田市の夏の風物詩ということで、国立市と交流のあった旧合川町の太鼓で大きくにぎわって、随分人も出たと聞いている。

◇フィルムコミッション事業の最たる例として、「四月の永い夢」は、国立を舞台にした映画ということで、これは、国立そのものが、お店も実名で出ており、銭湯や公民館がそのまま映されたりして、私としても見たことのある景色だなということが、随所に出てくる映画である。

◇この映画もかなり協力しながら公開まで持っていくことができ、その後、モスクワ国際映画祭で、国際映画批評家連盟賞をいただく映画になって、手ごたえのあるフィルムコミッション活動となったと思っている。今後も、この映画監督が、国立を舞台にして撮りたいということだったので、ぜひ、国立を舞台にしながら、ロケ地めぐりみたいなものが今後実現していくと非常に喜ばしい。

◇この映画については、市長もロケ地をめぐって、非常に感銘を受けたというようなことをお話しされており、大変ありがたく感じている。

◇今後は、観光案内人による国立市の歴史や文化、自然、学園都市としての魅力を発信するというのが、鍵ではないかと考えている。当初は、国立に観光地と呼べるものはあるのか疑問もあり、「観光」とつけることが、少し恥ずかしいような気もしていたが、やはり、「観光」というのは、1度見たら、もういいよということではなく、何度も四季折々訪れるたびに新しい発見があるとうことも、町の魅力を生み出していく一助になると現在では思っている。観光案内人が、観光コースを粘り強く育ててくれているおかげで、活動が広がってきているなど実感しているところである。

◇2020年の春には、国立の旧駅舎が、国立駅南口に戻ってくる。文化財として再築され、市内以外の人々が集う交流拠点ともなるわけなので、国立の歴史や魅力を発信する玄関口、文

教都市にふさわしい歴史、文化、芸術の発信基地として、価値をどのように広げていくのかということを市民の皆さんとともに考えていくかが、今後の課題となるのではないかと。

◇国立市観光まちづくり協会としても、そうした活動と大いに連携しながら、活動を広げたいと考えている。何分、会費がベースの協会であり、財源が非常に限られていることから、いろいろな事業をやる上では事業に対する援助をいただかないと、事業がなかなか成り立たないこともあるが、さらに活動を広げて、定着させていくということが大きな使命でもある。

◇活動の土台には、やはり資金が必要であり、NPO法人とはいえ、自分たちの活動が、どんどん広がっていくだけの財政の豊さも持たなければならないため、今後は、その辺りも確立するために、どういう形で、どう提携しながら活動を広げていくかということを考えていく必要がある。

■ゲストスピーカーの説明後、委員より質疑・意見等があった。

【湯本委員】

◇観光案内人は、どのくらいの人数がいらして、実際の活動というのは、どういうものなのか教示願いたい。

【松本氏】

◇現在は、14名である。

【三田氏】

◇今後の2期生を含めると約30名となる。実際にコースを案内しながら魅力を伝えるということは非常に難しい行為であり、訓練を要するし、実際にいろいろ歩きながら、お互いに勉強し合いながらやっている。

◇観光案内は単純に案内するというのではなく、やはり、町を楽しむことが重要だと考えており、例えばタケノコのとれるシーズンには、南部地域でタケノコ掘りをやったり、本日実施したが、川遊びの中では、用水を活用しそこを一定区間、浮き袋に乗って流れて遊ぶであったり、城山下のきれいな矢川を歩きながら、魚を採ったりといった国立の自然に親しむという取り組みを行っている。

◇我々としてはきちんとコースを決めているため、後は旅行業者が、我々がセットしたコースに基づき独自に募集をしてくれて、案内人だけがそこについて、案内するといったことも広がってきている。

【湯本委員】

◇そうすると、それを案内してくださいという申し込みのあった人に、案内をするという形をとっているのか。

【三田氏】

◇いろいろな企画を出すと、この企画に参加したいということで、応募があり、何人かまとまって、そこからスタートすることになる。

【渡辺委員】

◇観光を望む方というのは、近郊の方が多いのか。また、外国人の申し込みもあるのか。

【三田氏】

◇外国人は、まだそんなに多くない。近隣の町から来られる方が大半であると思う。

【高橋委員】

◇さくらウォーキングは、立川市観光協会と連携しているし、新選組の話があって、日野市なども絡んでいると思うが、周辺市との連携といったものは出来つつあるのか。

【三田氏】

◇日野市、国分寺市などとの連携は行っている。

【高橋委員】

◇先ほど新選組の話があったが、先日、本田家のお話を伺う機会があり、本田家の古い文書の中に、近藤 勇や土方 歳三が、よく本田家へ遊びに来ているという文章もあつたりして、結構使えるのかなという気はしている。

【三田氏】

◇『解体新書』の原本もあると聞いている。貴重な資料が本田家にはたくさん眠っていると聞いているので、今後の展開が期待できる。

◇ただし、観光はまちの振興課、本田家は教育委員会という、行政上の区分けが多少あって、やはり、その辺を観光まちづくり協会では自由につなげるのかなと思っている。

【沢辺委員】

◇運営について、会費で運営する日本でも珍しい観光協会ということで、NPO法人ということで運営されていると思うが、シティプロモーションというと、自治体の良さを発信することで自治体が独自にやっているイメージも強い。

◇国立の観光まちづくり協会は、どのような経緯で会費で運営するような形をとることになったのか。

【三田氏】

◇特に行政との距離があつたわけではなかったが、立川市のように商工会の事務所の中に、観光まちづくり協会もあり、そもそも商工会ではなく商工会議所なので、力をもっており、観光事業も一緒にやっているところもある。

◇国立市の場合は、やはり、市にも潤沢な資金があるわけではなく、国立市に観光係があつたわけでもなかったため、最初のスタートが異なっていた。

◇商工会では先ほど紹介したとおり、国立市の中小企業振興条例に沿って、地域の活力創出委員会を商工会でつくろうということで、そのときに、当時の商工会の会長が、私のところへ訪ねてきて、地域を元気にしようよという話を持ってきた。私としてもそれはとても大事であると感じたため賛同したところである。

◇地域おこしというか、やれることをやりましょうというところから、だんだん観光が脚光を浴びるようになって、国立市もやはり観光が必要という流れができた。観光ということをばねにしながら、まちづくりをやっていくという視点も大事だろうということで、国立市観光まちづくり協会という名称にし、NPOの認可を受けることとなった。

◇一方で、NPO法人としてどのような活動ができるのかということは、もっと研究する必要があると考えている。そんなには利益を上げてはいけないといわれつつも、いろいろな活動をやるためには、どうしても一定の土台が築かれるような活動の広がりをつくらなければならない。

◇現在のところ行政からの支援は、シティプロモーション、フィルムコミッションの事業に対して、市から委託を受託しているところであり、それが大きな原資になっているのが現状であ

る。

◇他市と比べると、運営経費的に桁が1つ違うところもある。

◇今後、駅舎が国立駅南口に戻ってきて、その中で行政と民間においてどのような連携ができて、どのような役割を互いに担っていくのかを考え、これを国立市のまちづくりの一つのばねにしていけたら良いと考えている。

◇行政にできないことで、民間の力で補えることはたくさんあると思うし、行政の限界を超えて、何かできていくような力が生み出せたらと思っている。これは、一般的には言われるけど、なかなかできないのが現実であるが、これを超えるためにも、まちづくりの原点、シンボルが旧国立駅舎になってくれれば幸いである。

【渡辺委員】

◇私は以前から合川町との交流に関わってきており、子供たちをホームステイさせたりしていた。当時は、夏場は秋田から子供が来て、冬場は国立から秋田に行つてという交流が何年も続いて、気づくとその交流がなくなって、まと火という形で、今は交流が継続されているように思う。

◇例えば、どんと焼きなど過去にずっとやっていた独自のいろいろな事業、お祭り、文化を観光まちづくり協会が発信しているというふうに理解してよいのか。

【三田氏】

◇文化の発信を担っているとまでは言い切れないかもしれない。やはり、それらを幅広く観光まちづくり協会も応援するため、活動や取組みが広がるよう支援しているというのが現状である。

◇そのため、先ほどのくにたちNAVIといったところで映像としてもどんどん発信しながら、さまざまにPRしていくというのが我々のスタンスである。

◇国立市の場合は、まと火をはじめ、生い立ちに応じて、それぞれ実行委員会が存在している。市民祭りやさくらフェスティバルなども実行委員会形式で、すでにかなり連携しているがこのようにこれからも発信し、つなげていけるような形を目指していきたい。

◇さくらウォーキングでは、くにたち郷土文化館を訪れるコースをとっているが、市民があそこを訪れることは意外と少ない。そこで、あそこに寄っていただいて、血管年齢測定などの健康チェックを実施したところ、大変な人気で、あそこへ行って、展示を見たという意見も聞かれ、楽しみながら寄り道もしていただけるなど、ぽつん、ぽつんとあるものを、つなげられる役割も果たせるのかなと思っている。

【今村委員】

◇散歩できるということが国立市の強みであり、ほかのところだと、やはり、交通機関を使わなければいけないということがある。よって、小さいこと自治体ということが強みなのではないか。

◇ご説明いただいた内容は、タイプとしては2つあって、十二単などもそうだが、古くからあるものをうまく活用して新しいイベントを組んだりすることと、もう一つ、LINKくにたちやフィルムコミッションのように新しいものを創出して、そこに人を集めてこようというものである。

◇私が非常に注目しているのはフィルムコミッションで、かつて、忌野 清志郎がたまらん坂に

住んでいてというと、やはり、聖地めぐりみたいなものが、現在でも命日になると起こったりしている。アニメなどでも聖地めぐりがあるように、多くのロケをやることによって、新しい観光名所が作られていくということは大変好ましい。

◇LINKくにたちは、市民が中心になってやるもので、それもすばらしいと思う一方で、未来に向かってより何か活性化させるために、より外部からの新しい力を呼び込むということについてかなり力を入れているのか。

【三田氏】

◇結果として広がってきているということだと思っている。今後は、谷保天満宮や本田家など、歴史あるものについても、新たな力になりうるということが強みと考えている。

【今村委員】

◇南部地域については、ロケなども少ないような気がしていることから、積極的に南部地域に関心が向くように仕向けてもらいたい。

【松本氏】

◇我々としてもそれは考えているが、歴史のある町ということもあり取材、撮影がNGなところが結構あったりするのも現状である。

【三田氏】

◇国立市内ということで、そこに、どっぷり腰を落ちつけて、撮っていただけると大変ありがたいが、例えば、フィルムコミッションの撮影などでもある情景が、監督のイメージに合えばいいよということで、国立市でなくても良いということはまだあり、そこは、なかなか難しいところでもある

◇連続ドラマに使われている舞台で有名な場所を1つ撮ってもらい、それが大きな脚光を浴びることもあるとは思いますが、そうではないと、絵があっても、細切れに出てくると、なかなか国立市として認識されることは難しい。

◇今回、フィルムコミッションの一環で放映されたドラマでも、私は倉庫業を営んでおり、その昔ながらの倉庫というイメージがあるということで、そういうところを少し使用されるなどした。あるいは、うちの門が、コンクリートの打ちっ放しの門になっていたため、ここは、校門として、小学校の入学式のシーンで使用されたりもした。現実として、そういうことが多いのは事実である。

【福間委員】

◇実は、国立市を舞台にして、国立市が半分以上映っているという映画を4本つくっているが、たまたまフィルムコミッションと出会いがうまくいかなかった。少なくとも、このようなマップなどがあるのであればお役に立てたかもしれない。

◇フィルムコミッションも様々なやり方があって、特にこれを招いてつくるということは、あまりないと思っている。何らかの形で打診があったときに、どういう対応になるのかも含め、次回作を近日中に制作予定のため、その際にご相談させていただきたい。

【足羽委員】

◇福間委員をはじめ、国立市には様々な活動をなさっている著名な方がたくさんいらっしゃるので、そういう方の横の連携や情報共有がどんどん進んでいけば良いと思う。

◇前半のほうでのディスカッションともいろいろな形で関連しそうな感じもしている。

(4) 事務局からの連絡事項

■事務局より次回以降の開催について下記のとおり説明があった。

【事務局】

◇次回は8月下旬から9月上旬を予定している。

◇議事内容としては、これまでのヒアリングを踏まえ今後の事業立案に対する意見交換を行っていただく予定である。

◇また、次回に向け事前課題を設定させていただく予定である。

(5) 閉会